

第二次世界大戦直後の日系アメリカ文学

——1946年、1947年の『羅府新報』の作品を通じて——

山本茂美

はじめに

筆者は長年日系アメリカ人の文学について研究してきた中で、日系アメリカ文学の背景には、日系人を対象にした日系新聞での文学作品が深く関係しているのではないかと考え、2006年、2007年と続けてアメリカ合衆国の日系アメリカ人のために出版された有名な『トパーズタイムズ』、『ユタ日報』の中から研究を進めてきた⁽¹⁾。日系アメリカ文学の中には、必ずといっていいほど、一世、二世の体験談が組み込まれている。しかし、日系アメリカ文学が注目され始めた頃、一世、二世の人々は、強制収容所に入るという不名誉な体験を恥じるあまりに、決して周りの人たちに自分の体験も思いも語らなくなっていた。そこで、注目したのは、自分達の思いを素直に表現していた日系人のための新聞だった。ここには、当時の日系人の素直な思いが作品として掲載されていた。先に述べたこの二つの新聞は、第二次世界大戦中の強制収容所での情報提供に使われたり、また移民当時から出版されていたが、終戦後様々な事情で廃刊されたりしたものである。

そこで、今回は、現在もロサンゼルスで出版されている『羅府新報』の中から、近年の日系作品の背景になる作品がないか研究を進めること

にした。ロサンゼルスの日系アメリカ博物館で紹介された、『羅府新報』のマイクロフィルムだが、現在第二次世界大戦前後の『羅府新報』を調べるためには、国会図書館か和歌山市民図書館のマイクロフィルムを閲覧するしか手段が無い。大変時間のかかる作業だが、筆者は、二つの観点からこの『羅府新報』を研究することにした。一つは、どれだけ、日系三世を中心とした日系アメリカ文学に『羅府新報』の中の投稿作品が影響を与えたか、またいつ頃から、日系アメリカ文学が新聞の中で発表されるようになったかである。

後者は、当時強い反日感情の中でなかなか作品を世の中に発表する機会がない日系人が、まず活字にする唯一の手段として利用したことがわかっている。現在1951年初めの新聞まで調べを進めているが、まだ日系人の文学作品とはっきりいえるものはほとんど見られない。俳句や短歌などが大半である。ある日系アメリカ文学の研究者によると、アメリカ合衆国の中で書かれた日本語の俳句、短歌は立派な日系アメリカ文学だという見解もある。この点では今回研究対象とした1946年、1947年の作品は、日本語のものも立派な日系アメリカ文学といえるかもしれない。終戦後再刊されたばかりのこの数年に的を絞ることにより、収容所での思いが作品の中にどのように組み込まれているかを研究することにした。

1 『羅府新報』について

海外バイリンガル日刊紙最大といわれる『羅府新報』は、カリフォルニア州ロサンゼルス市で発行されている有料新聞である。現在の発行部数は、15,000部ほどで、日本語版と英語版があるが、購読者は日本語版のほうが多い。読者は南カリフォルニア、更に全米にまたがるだけでは

なく、日本や他の国に在住する人も購読しているという。表紙は、右側のページから縦書きで始まるので右綴じ方式で、英語版は、左のページから横書き左綴じの構成になっている。

さて、この『羅府新報』は1903年（明治36年）4月、移民の山口正治、渋谷清次郎、飯島敬一郎の3人によってアメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルスのリトルトウキョウで創刊された。羅府は、漢字読みでロサンゼルスという意味である。最初は、週2回250部からスタートした『羅府新報』は、1904年に日露戦争が始まると400部を突破し、山口氏らは合資会社を組織し、美人投票などの企画で読者を獲得したという。

1907年には、経営者が飯野陣内、野沢宏、中村正平、戸田弘定の4人に移り、編集部と工場の区別をつけるなど新聞らしい体裁を備えた日刊紙になった。1901年1月1日には『羅府年鑑』第一号が発行され15年まで続いた。その後1938年から1941年まで続いた。

1910年ライバル紙『羅府毎日新報』の台頭や銀行融資が難しくなるなど多くの困難に直面するが州銀行監督官により競売にかけられ、菅野正雄が1,335ドルで落札。猪瀬伊之助、井上昌、駒井豊策らが株主になった。

『羅府新報』の基盤が安定したのは、1922年に駒井豊策が社長になってからで、1926年には英文版を発行。二世をターゲットにした新聞作りに移行する。今回は、研究範囲から外れるが、この頃の内容は、人種差別、排日移民法通過、1930年代初期の経済恐慌、日米関係の悪化など、困難な社会、国際状況の内容を伝えている。この頃の新聞には、文学的要素はなかなか見られない。こうして『羅府新報』は第二次世界大戦が勃発し、日系人の強制立ち退きが発令するまで新聞は、発行され続けた。

1946年1月1日に復刊。政治的危険があるとみなされた多くの日系人同様に豊策が収容所から開放されなかったため、長男の明が社長に就任した。しかし、排日感情はまだとても強かったため、銀行からの融資は難しかったという。しかし、再刊の反響は大きく、購読や広告の依頼

が殺到し、日系人のために収容所から帰った後にどこに住むかどんな仕事をするかの情報提供や行方不明になっている友人知人の消息を確かめる手段として大いに役立つようになった。今回の研究対象の詩や短歌、俳句の投稿や小説の記載も見られるようになっていく。1948年には毎日新聞欧米部長の高田市太郎と駒井氏が会うことで毎日新聞の記事が転載されるようになり、日本の記事も豊富に伝えることができるようになった。現在は、AP通信や、日本の時事通信、共同通信とも契約し、更に充実した内容になっている。

さて先に述べたように本研究においては、この『羅府新報』の中で1946年に再刊された後の新聞書面の中でどのような文学作品が掲載され、日系文学の要素に組み込まれていったか、またいつから日系アメリカ文学として英文による小説が掲載されていくかを調べていく。

2 1946年の作品について

さて1946年以後の作品を考察するにあたり、改めてこの時代の日系人の境遇を考えてみたい。強制収容所を出た後、日系人達は、収容所時代の体験やそれまでの経験を口に出すことが無くなった。その為、この時代の日系人の動向を知る唯一の手がかりとして新聞の存在は注目されている。更に、新聞に掲載されている短歌俳句さらに随筆はかなり貴重なものとなる。

1946年1月1日『羅府新報』は、再刊された。その中には、和歌が掲載されている。

晴野

毛利さいさんぼく

大き陽斜に落つる窓をみる

砂丘しかに紫に濡れ

柳型をば夕陽に干して眠る男
トカゲ静かに尾をとれるも

夢に見し妻の面影やまにやつれ
かなしきことを語りけるかも

焼け跡に寂しく残る半裸の
給手にも得とらで灰を吹きしてみる

友はまたつれづれのままだに日わもすを
裸形の女を描きけるかも

籠居

神戸孝子

パロールとなりて出所たる人の上に
心寄りゆくひと時があり

別離るればまた逢ふよすが
何時あらんみ職は尚進み行くなり

朝づく日朗らにいさ差し百鳥の
囀る聞けばみ多と思はず

みんなみのこの高原の暖かさ
真冬も庭に花は咲きつぐ

寛ぎて飲食すいとまなき夫や
立居忙しく務に出ずる

さらに新しい環境のなかで力強くいきていこうとする作品も見られる。

再起の年が明けた

神浦猷洋

苦難の日が暮れ
再起の年が明けた
血のひいた顔にも笑浮かべて

まっしぐらに進もうぜ
二世よ立ってくれ
三世の為に
そして一世を引き連れて

すわ再起の年が明けた
我らの再起の年だ
浸たる血をふき取って
真っ直ぐに進もうぜ
二世よ立ってくれ
三世の為に
そして一世を引き連れて
君の荷は重く道は険し
でも七転び八起きすべき
吾民族の意志と熱と気骨と
誇りとを引き受けて

一日の新聞の中には再起をテーマにした作品が他に2編掲載されている。苦しい収容所生活の後、新たな生活が始まるに至り、一世の素直な気持ちを表現した作品で、なかなか素直な気持ちが現れなくなった時期の貴重な作品である。

次に2月20日の川柳に注目したい。

MPに会えば苦難の日想ひ	大江孤舟
囚われた生活恋し昨日今日	井上軒草
生き延びる甲斐を二世の肩に上り	吉里龍耳

悲しみや辛い思いをあえて表現することで一世たちは、新しい時代を生きていく決意をしているのであろう。

次に3月2日の「初歩」という詩を紹介したい。

本棚がひとめでやられて
あるものは空に
あるものはめちゃめちやに倒れて
遺瀬がない

玩具はあちこちと
新聞雑誌はぼろぼろに踏まれて
今までのなき哀訴が
吾が書齋にあふれている
そは 我が信子
あの初歩の嵐か

中には 俺の愛書

春月の『夢心地』の詩集がばらばらと
 我が心情を描いて
 知らざる詩心を慰めてくれる

ああ あの隅から
 またぼとぼと歩いて来る
 その情景
 立って倒れる 倒れては立つ
 余程の努力ではない
 その進み…
 ああ歩いて止まる力
 人生の偉大なる力
 今日の我等が闇の生活に
 1月出発の誓約が示されている マツイシュンスケ

4月30日には収容所をテーマにした和歌が掲載されている。このテーマの作品を書くことは、当時の日系人にとって勇気がいる事だったと推測する。

収容所詠

梢 月

霧晴れつつ夕べ 静けき群鳥の
 音無く過ぎしテキサツの空
 山を見ぬ広野を朧宵の幕
 下りつつはかなき細月光る
 うたふイトドはかなし棚下
 に羽づくろひしつ鳴きつきて
 居り

サロリーの黄葉にそへて野辺
 の花つましく生けてともしき
 に居り
 ともかくも今はあり経む冬来
 なはいかに過ぎさきいえなき
 はらから
 人の世の歴史にも見ぬ変動なり
 夕陽の色も星も身に染む
 物の芽のはつかに萌し庭に
 して蟻の生活は営まれをり

5月1日には、「流れ星」という歌集の作品が掲載されている。この「流れ星」は、テキサス州クリスタル収容所の短歌同好会の歌集である。できるだけ日系人であることを隠して生活し始めた人が多い中で、収容所を出てもまだこのような活動を続けているのは、珍しいことである。

流れ星

毛利たいさんぼく

テキサツの野の宵闇を南さして星のなかるる

浮き草抄

川原八重子

山吹の花咲く頃を思はする古里に似しここの春かも

このような作品は、その後定期的に掲載されるようになると説明が添えられている。新年を除いてあまり文学作品が見られない新聞に、あれこれ工夫をして当時の日系人の生活に潤いを与えようとする活動が少しずつ見られるようになったのは、注目する点である。また、詩や短歌を掲載する意味を詩に託した作品がある。この作品は、先に紹介したマツイシュウスケのものである。

詩人に与ふる詩

探す道づれて
 迷いにぬれた半世紀に
 詩への歌は
 見るべからずや、崩れたる
 己の名に舞ひし
 詩人の作乱
 今は知りに託す
 時の思潮に湧く

やさしさ追憶よ 流れ行け
 傷害に痛み行くところ
 はたいづる島の
 山河は翳り消えぬ
 まこと生きず
 偲ぶまぼろしに去にし衿の
 無窮の跡に影あらむ

夢より醒めてる
 まことを迎る砂漠の
 友らの詩人をしらべに合わせつつ
 驚き喜びを青空を貫かし
 詩への教えや
 時ぞにと一
 一生の一つ一我が求めになりき

この作品は当時の文芸作品がどのような動機で発表されたかを知る一

つの手がかりになると考える。

更に、今回の研究対象となる1950年までの新聞の中で数少ない英文の作品が5月29日に掲載されている。

On this Memorial Day...

In Memoriam

....of those courageous men who gave their lives

In supreme effort and sacrifice...

The Befallen Nisei GIs

... it was but yesterday

We shared our happy days

with careful thought of

no tomorrow;

... today ended peacefully;

Tomorrow woke a-storming

the violence abated but

scornfully

in its wake, left sorrow

... memories of giveth pain

yet, if these boys in giving

have not given in vain...

there will be a happy tomorrow,

-BY TERI

Watsonville, Calif

さらに7月18日には、くじけそうになる自分を励ますべき詩も見ら

れる。

情熱

アイダホ 佐藤聖一

年が寄るのを悲しむのではない
 この俺の身体を焼き尽くすような
 情熱が失せていくのを嘆くのだ
 相手を焼き尽くさねば止まぬような
 情熱の火よ
 この俺の胸に燃え盛れ
 死するまでどんどん燃え上がれ

このように少しずつ詩や短歌の作品が掲載されるようになっていく。先に紹介したマツイシュウスイは、活発に作品を発表している。他の作品でも共通な点は、彼らが収容所の生活を心に秘めたテーマを持っていることである。はっきりとした言葉にならないものもあるが、自分達の心情を伝えたいという思いが強く感じられる。

『羅府新報』の英語版の中に詩やエッセイを見ることは、この時代にはまだない。さらに、10月までは、日本語のエッセイも見られない。10月5日には、阿世賀紫海のエッセイが掲載されている。

月に捧ぐる芋と

印象深い2回目の観月は偶然にもポモナよりハート山へ送らるる
 汽車の中だった。幸いにして電燈に故障を生ぜしため車中に燈火なく、
 果てしなき草原より煌煌として立ち上る明鏡の如き明月は斜に
 車内を照らし、同胞の顔はほの白く麗しく見られた。十目の見るところ、
 十指の指すところ、これみな神神しき明月であり。口よりほとぼしる声はことごとく感嘆詞であった。

観るほどに行くほどに月は寸尺と地を離れ、ある時は巖山に鬱現し、或いは樹木に明滅し、……

ハート山の十六夜も美しかった。空青き深夜の月それはすごいほど美しいほど美しい眺めだった。

高峰を背に千軒の秋の月

150斤の自然石に自ら右の句を刻しハート山退去の前日、住居の庭の地中深くうめたのであった。帰還後の今日、月を眺めてハート山を想ひ、疲れては又キャンプ生活を連想し、なつかしき思い出の数々は走馬灯の如く尽きることを知らぬのである。

この作品で重要なことは、作者がまとまった形で収容所での思いを表現していることである。数多くの日系人達が全てを隠して生きていこうとしていく中で勇気のある行動である。こうした作品は、その後の日系アメリカ文学に大きな影響を与えたであろう。

1946年の新聞はこのように、再起にかける心を表現したもの、また収容所での思い出を何とかきれいな思い出にしようとして文字にしているものなどが多く見られる。文学には関係ないので今回は紹介していないが、ある記事の中に、「アメリカ人になりたい日系人」というものがある。これこそが、当時の彼らの真の声であろう。

3 1947年の作品

1947年の作品は相対的に見てまだ1946年の作品と大きな違いは見られない。多くは、収容所の景色をよんだもので、その他は、これからの新しい生活に対して自分の気持ちを高めていこうとするものである。1946年と大きく違うのは、いくつかの随筆が、単発または連続で掲載

されるようになったことである。そこで、ここでは、短歌、俳句、川柳以外の作品を中心に調べていく。

1月27日 二世のことども（1）

新しく課せられた大きな使命 武藤省吾

終戦後日本に二世が入って来て二世のことが新しく注目を惹くし、いろんな方法で検討されるようになった。二世に対しては人一倍関心を持ってきた私としては、それらの批判にまた人一倍関心を持たされている。……

二世の使命の最大高のものは、『日米親善に貢献する事』だと我人ともに説いてきた。考えてみると密かに偏見な考え方でもあったようだが。日米親善に尽くすことは、二世の使命の一つであることに合い違いない対戦争によって同じ日米親善といっても前と今では二世の立場のある方が大分違ってきた。……

この随筆はこの後数ヶ月に渡って掲載されている。世の中の中心は、いまや一世ではなく市民権を持ったアメリカ人の二世たちであり二世に寄りかかって生きていかなければならなくなった自信をなくした一世の様子が見え隠れする。この頃の詩、短歌そして川柳は同じく二世に対するものが非常に多くなっていくのである。

次に、同じテーマを別の視点で語った随筆を紹介する。

6月13日

父と子 清水恵

隣家は書読む子らの声聞けば
心に秘めていきたかりけり

歌人島木赤彦の子の為に生きようとする父の心がひた向きに言表されているこの歌に胸をうたれるものがある。

父の心は母親に細かく直接的でないが為に見落とされ易くその大らかな愛情を人情の機微に触れ、自然の美を我が心に把握しようと努力する歌人によって明らかに浮かびあがらせているのを知る。

夫が日米開戦後検束され郡監獄に一夜を明かした朝の便りに、「不思議に妻の顔は浮かばず二才になろうとする長男の面影のみ浮かんで消えなかった。」とあったが内面的な『父の心』の全貌を覗かれて涙ぐんだ。……

隠された父の心は子の成長するに至って始めて有意義に活動するものである。……

センターで老いて子無き多くの男性を見るに付けこの人々の全てが父であったならば在留同胞の総数も幾倍し其地軸も牢固として総立ち退きなども或いはなかったかもしれない等、考えられ人の子としての父の発展する自然の行程を歩むべき意義をもつぶやいたりした。それにつけても米国に父によって市民として生を受けた二世によって民族発展史上の同胞の父としての一世に艱難の一路を辿ったその報いに帰化権を与えることができなかつたものだろうか。毎年『父の日』に若き人々の『父への市民権獲得の運動』が繰り広げられていたなら民族融和の姿としてもっと早くその実績は上がっていたかもしれない。……

この随筆は、『羅府新報』の作品を調べていく中でめずらしく一世の心情を表現した貴重な作品である。一世は、強制収容所に入れられたとき、自分達の価値を全て奪われ単に日々をぬりつぶすだけの立場になった。そのため多くは、生きがいを失い自殺したり、病気で命を失ったりする者が多くあらわれた。そのような歴史的な一面を垣間見る作品である。

次に『羅府新報』の英字版の中で数少ない英字による詩を紹介したい。

May 9

A Tribute to Mothers

Your memories are mine to keep,
 Forever and ever, awake or asleep,
 The tenderness that sweep over me,
 Whenever the world seems bitter to me
 I see your vision –a halo of smiles
 Through time and space across the miles,
 Love ever tender yet so strong-
 It's like an unforgettable lovely song,
 “Mother mother,” I love you so-
 How can I tell, but, you see me to know,

BY NANCY KUWAHARA

英字による作品を純然たる日系文学と定義するならば、この作品は、まさに日系文学の作品である。今回の研究では、いずれ掲載される日系二世、三世による小説までの過程を辿っているが、この後も数年まで調べてもそのような作品に出会うことは無かった。更に上に掲げたような英字の詩もなかなか見られない。その意味でも大変貴重な作品である。

最後に年末に掲載されたクリスマスに寄せる英語のメッセージを紹介する。

A Christmas Dream

By HISAKOTANAKA

It was September of last year when I went to see a friend of mine just before leaving Chicago. Astrunded over the news that I had finally decided to return to Los Angeles, she said to me, horrified, “Are you really going back to Los Angeles? That city is not what it used to be. Don't you know that the Negroes

have migrated in by thousands during the war? No, Little Tokyo is not what it used to be.” She shoot her head as if my decision to go back was tantamount to dying into a hole fraught with pests, bugs, and worms.

Narrow ‘Niseism’

It is unfortunate that some of us still retain this narrow “Niseism” in our psychological makeup. My friend is mere to be pitied than censured for her thinking is superficial and short-sighted. My friend is guilty of generalization, as so many of us are, and to generalize is not only dangerous but unjust, and oftentimes contradictory.

We are not infallible; nor are we so pure in heart and perfect that we should condemn an entire race for the God-given so, are we not contradicting ourselves? Color of the skin of our fellow being; for in doing so, are we not contradicting ourselves? Are we practicing the same abhorrent and evil ways of our tormentors? We who have condemned so bitterly because “they judge us only by slant of our eyes and the color of our skin, and by the acts of a few among us.”

‘We Are The Smug’

You see, we are not alone in intolerance for we are the smug and the bigoted. And then, below us, is the aggrieved black man in a dark corner, cowering in fright and bewilderment. But see there e in another little corner the hated Jew under the lash by the whip and fury of ugly daren’t we look for ourselves, blind that we are, for where are we, but in another corner, suffering the same fate!

.....

A Christmas Dream

The unification of Nisei is stressed only as a means toward a greater end. Let us be realistic however, without losing sight of the horizon-the goal toward which every little thought and act of our must be directed: the unification of

humanity where all the hues fuse harmoniously for only then can it be truly said that there is peace on earth and good will to All men. The goal seems remote and unattainable, but it is a dream, a Christmas dream to dream of a warm and heartening human companionship that transcends the existing barriers of seemingly fast and stolid bars.

And yet who has not admired the graceful arch of a rainbow bridge in California mist or in Desert dawn? Who has not witnessed how naturally and melodiously one color fuses into another ...how consonantly all the hues blend into a harmonious unity?

It is a dream, a fanciful dream, perhaps and withal, a sober dream on Christmas Eve.

このエッセイには、当時の二世の苦しい心境がよくあらわれている。クリスマスの夢というタイトルからはかけ離れた内容である。第二次世界大戦で、信じていた母国アメリカから敵国人というレッテルを張られた彼らが、その後どのように戦い生きていったかを垣間見る内容といえよう。

今回の研究では、『羅府新報』再刊当初の内容に絞って研究したのでこの作品を最後に終わりたいと思う。

終わりに

『羅府新報』を調べ始めたのは、近年の日系アメリカ文学を研究する中で、どの作品にもやはり日系一世のモチーフが入っていることに注目してのことだった。日系アメリカ人の歴史を研究していた頃あまりにもこの時代の資料が少なく、いかに日系一世が沈黙を守り生きていたかが

うかがい知れた。それだけに、『羅府新報』を調べていくときこのように、自分の気持ちを表した詩や作品が掲載されていることに驚きも感じた。しかし、まだまだ小説のような文学作品が現れるには、多くの月日を待たなければならないようである。

当初考えていたより多くの収容所時代に関する作品が掲載されており今回は、再刊2年に限って研究することにした。今回の作品は、終戦直後の貴重な作品というだけでなく、歴史の一次資料としても日系アメリカ史に大いに役立つものである。今後折々に、国会図書館に足を運びさらにマイクロフィルムを起し、貴重な作品を見つけていきたい。そして、文学作品としての分析だけでなく、当時の日系アメリカ人の歴史研究にも役立てていきたい。

注

- (1) この内容は、愛知学院紀要、32号、33号、並びに金城学院大学論集、人文科学編、第3巻第二号、並びに4巻第二号で詳しく述べている。

Work Cited

- 1 羅府新報、1946年、1947年、マイクロフィルム、国会図書館

Work Consulted

- 1 藤沢全『日系文学研究』大学教育社、東京、1985
- 2 上坂冬子『ユタ日報のおばあちゃん 寺澤国子』瑞雲舎、東京、2004
- 3 黒川省三『アメリカの日系人』教育社、東京、1979
- 4 鶴田真『日系アメリカ人』講談社現代新書、東京、1971
- 5 村上由見子『アジア系アメリカ人』中央公論社、1971
- 6 若槻康雄『排日の歴史』中央公論社、東京、1971

